

そうろかんしゅ

#48 草露貫珠

作者：中村立節（なかむら・りゅうせつ 生没年不詳）

岡谷義端（おかや・ぎたん 1661-1748）

刊行：宝永2年（1705）



📖 解題

■ 内容

『草露貫珠』は本文21巻・首1巻・拾遺1巻から成る草書字典である。草書字典とは、漢代に発生した書体である草書の「読み方」と「書き方」を知ることができる参考書である。軽快敏速に運筆することが特色の草書は判読が困難であり、それを助ける字典は古文書研究の参考書としても重要な存在である。



[728. 4/23]

徳川光圀の命により、中国の漢・魏から元・明までの草書の文字（草字）を法帖より採集し編纂された。選ばれた書家はおよそ740人にのぼる。収録された真書の文字（真字）は6,070字であり、対する草字は49,500余字である。つまり、真字1字につき平均8種の草字が掲載されていることになる。漢和字典と同様の部首索引が採用され、字体ごとに出典（書家）が付されており、わが国初の本格的草書字典と言われる。掲載の草字は、後世に「書聖」と称賛された王羲之、唐の四大家の一人顔真卿をはじめ、草書の名手として名高い智永、狂草体の大家と言われる懐素など、いずれも書の名家の筆跡である。

徳川光圀の代表的な文化事業といえば『大日本史』編纂であるが、水戸藩「彰考館」に多様な学派の学者を採用し、修史事業以外にも他藩に類をみない成果を収めた。万葉集の研究、和文と漢詩文の修正、『禮儀類典』『神道集成』刊行であり、『草露貫珠』もその成果の一つである。

■ 作者

編纂者の一人中村立節は出雲出身の書家で、号は義竹。書を以て水戸藩に仕え、『草露貫珠』の他に『書法纂要』『墨池妙訣』などの著作がある。

岡谷義端は立節の門人であり、字は充之。立節の死後その仕事を引き継ぎ、元禄8年(1695)に『草露貫珠』を完成させた。翌元禄9年(1696)に『大日本史』編纂に携わった水戸藩の儒者、佐々宗淳(号は十竹)による「序文」と義端の「跋」を加え、宝永2(1705)年に刊行された。その後、享保6年(1721)に義端による「拾遺」が刊行された。

本文を読む

<復刻>

『草書大字典：草露貫珠』中村義竹撰 岡谷義端編 隆文堂書店 1913

※当館未所蔵 国立国会図書館デジタルコレクション(インターネット公開)で閲覧可能

参考文献

『和漢書道史 改訂版』藤原鶴来著 好鷲書院 1956 [728.02/1]

『「草露貫珠」について：水戸藩編修の一大草書字典』飯野小八郎著刊 1969

※当館未所蔵

『草書の字典』円道祐之編 講談社 1979<講談社学術文庫> [728.03/27]

「草書大辞典『草露貫珠』光圀刊」(『全人』No.510 玉川学園 1990)

※当館未所蔵 玉川大学教育博物館 HP「館蔵資料の紹介」で閲覧可能

「草露貫珠と花押藪」(『水戸市史』中巻1 水戸市史編さん委員会編 水戸市 1991) [213.1/41/2-1]

「古典の研究と諸書の編纂「大日本史以外の編纂書」」(『徳川光圀 人物叢書 新装版』鈴木暎一著 吉川弘文館 2006) [289.1RR/4757]